



TITLE:

観測部五月報告

AUTHOR(S):

CITATION:

観測部五月報告. 天界 1928, 8(87): 289-293

ISSUE DATE:

1928-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161299>

RIGHT:

觀測部五月報告

四月流星の同時觀測概略報告

去る四月二十日前後、琴座流星群の出現機に際し、かなりの準備をして我が國では最初の流星同時觀測を行つた。此の計畫は、特に

(1) 今年四月二十日は新月に當り、此の前後は流星觀測を月が妨げないこと、

(2) 四月二十一日が土曜、翌日が日曜で、吾人公務を有つものゝ餘暇が利用し得ることの二つの理由により、又

(3) 近年我が國內に流星觀測の經驗が起りつゝあることによつて刺激された結果である、殊に、こんごは我が國でも最も天氣の好望な瀬戸内海沿岸に觀測網を張ることゝし、いろいろ内外交渉した結果、

- | | |
|-------------|---|
| 第1班: 香川縣高松市 | (高松支部幹事 田中氏及び京都より出張の ¹ 山本 ² 上島 ³ 村上三氏) |
| 第2班: 岡山縣倉敷市 | (京都より出張の ⁴ 中村 ⁵ 柴田 ⁶ 小山三氏) |
| 第3班: 兵庫縣姫路市 | (京都より出張の ⁷ 森川 ⁸ 稻葉 ⁹ 山村三氏) |
| 第4班: 和歌山縣金屋 | (和歌山支部の ¹⁰ 小横幹事及び ¹¹ 平林、 ¹² 登尾二氏) |

を主なものとし、尙ほ地方よりの希望により

- | | |
|----------------------------|------------------------------|
| ¹³ 吉田工一(大阪市) | ²¹ 八代田貫一郎(香川縣小豆島) |
| ¹⁴ 植田龜太郎(神戸市) | ²² 田中鐵馬(福岡市) |
| ¹⁵ 正木健三(松山市) | ²³ 三村剛昂(廣島市) |
| ¹⁶ 丹生谷壽美男(松山市) | ²⁴ 桑田久一(大阪市) |
| ¹⁷ 伊藤富一(三重縣神戸町) | ²⁵ 小松吉次郎(奈良縣畝傍町) |
| ¹⁸ 改發彌兵衛(神戸市) | ²⁶ 龜井壽彦(大分縣臼杵町) |
| ¹⁹ 西村豊次(姫路市) | ²⁷ 三浦清治(京都大學) |
| ²⁰ 長岡浩(京都市) | |

の諸氏に觀測用紙を贈つて協力を依頼した、

日が迫るにつれ、中村氏は四月十八日倉敷に行き、其の翌日及び翌々日に出張觀測者は多く出發した。始めからの打ち合はせは四月二十日から同二十三日まで毎日早曉午前〇時から同2時まで同時觀測をするを定めた。

しかし事實、和歌山では既に四月十五日から、又、倉敷では同十八日から

流星觀測が始められた。

天氣は四月の月上旬から十數日間の晴天が四月十八日頃まで續いてゐたが十九日頃から其れが少々崩れかゝつた。それでも二十日には一般に晴れてあつて、各地さにも可なりの收獲があつた。しかるに琉球から來た強力な低氣壓が漸次近づいて來て、二十日午後からは全國一般に曇天となり、其の夜から翌朝は大雨となつた。それから二十一日夕暮に少々雲が切れ夜半から晴れ模様となつたので多少望みを囑したが、二十二日は倉敷で可なり立派な觀測が行はれた外、他は多く曇られた。

此の同時觀測に参加した諸方面の觀測者たちからの報告は只今日々入手中であつて、未だ全部揃はないが、しかし上記の四班の人々のやつた觀測報告は全部集まつた。今此等について見るに、下表の通りである。

班	觀測者	十六日	十七日	十八日	十九日	二十日	二十一日	二十二日
第1班	山本	—	—	—	—	12(3)	—	1(1)
	上島	—	—	—	—	11(1)	—	0(0)
	村上	—	—	—	—	10(2)	—	—
	田中	—	—	—	—	5(2)	—	—
第2班	中村	—	—	5(4)	—	29(16)	—	29(18)
	柴田	—	—	—	—	19(8)	—	32(12)
	小山	—	—	—	—	8(0)	—	27(5)
第3班	森川	—	—	—	—	10(2)	—	4(3)
	稻葉	—	—	—	—	9(3)	—	8(9)
	山村	—	—	—	—	—	—	4(1)
第4班	小旗	27(3)	30(7)	17(0)	—	39(7)	—	—
	平林							
	登尾							

此の表の中で()の中の數は多分琴座流星群に屬するを推定されるものゝ數である。琴座の外には、冠座、ヘルクレス座等から發射する流星が可なり觀測されてゐる。尙ほ、此うして各人が觀測したものの中には、同一の流星が少なからずある筈であるが、此等の調査や整理は多少の日子を要するから、本誌次號に報告するか、又は(此等は可なり學術上の價直高きものであるから)本會 BULLETIN に報告される筈である。

三 月 の 流 星

四月の天界の流星報告中に α -Orionid 流星群らしいものを紹介されましたが、自分の観測(三月十六日十七日の)にも其れに近い流星群が出てゐたので御報告申します。

十六日と十七日に時間外観測二個を加へて總計六個(中一個茂代の観測)を観測し其中四個は同一流星群に屬すのではないかと思います。

観測時数 十六日 20時45分→21時10分 個数1個

十七日 19時50分→20時30分 個数3個

これに星圖に添へた記録を御参照下さい。猶この群の特徴としては速度は VS で、飛んだあとに灰をまいた様な痕を残してゐました。(特に(1)(2)は顯著で(3)のものも多少の痕を残しましたが(4)は痕は認められませんでした。(4)は或ひは別の群かも知れません。観測個数が僅かで且観測が兩夜にまたがつてゐるので輻射點決定が出来ないので残念です。

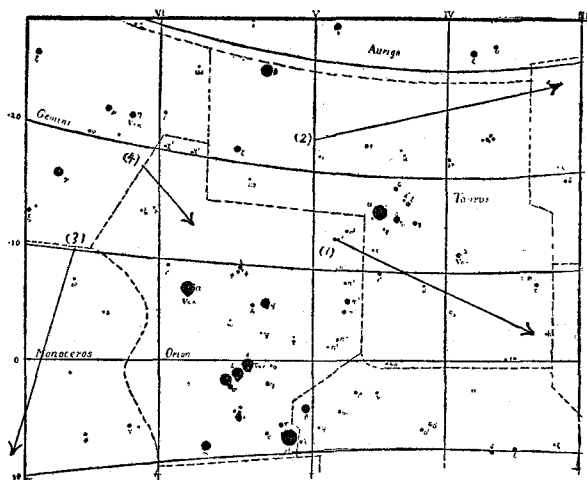
NO.	時 刻	確度	繼續時間	光度	速サ	色	雲量	備考
1	16 ^d 20 ^h 25 ^m	2	1.0?	1	VS	Y	0	mark
2	〃 20 54	6	1.5	2	VS	WY	0	〃
3	17 19 30	8	1.5	2.5	VS	W	3	〃
4	〃 20 20	9	0.5	4	rS	BW	0	—

時日が、村地氏観測のものより丁度一箇月ちがふので同一の流星群でなく他の流星群かも知れません。

猶二月十七日に自分は三個の時間外観測をしてゐますが、其中の一個は村地氏観測の群に屬すのかも知れません。(二月十七日 22 時 10 分出現のもの)不確なので報告する程のものでありませんが次の様なものでした、

Weight	Durati	Mag	Vel	Color	出現點	消滅點
2	0.3	4	R	R	12 ^h 40 ^h +30	13 ^h 20 ^m +35

三月二十三日には 21 時 55 分から 22 時 55 分まで一時間観測(観測個数五個、其中四個は獵犬座あたりに輻射點がある様に思はれましたが、顯著な流星群ではない様でした。



同月二十八日 4 時 20 分より 5 時 5 分まで曉天の観測個數四個，結果は甚だ貧弱で各々別々の流星群の様にしか思はれませんでした。

四月十三日

紀伊平屋 小横孝二郎

驚くべき流星雨の報告

近着の POPULAR ASTRONOMY 第354號に據れば、昨1927年六月下旬、全世界の人々がかの Winnecke 彗星を見て大評判にしてゐる頃、米國に於いて非常に見事な流星の雨下するのを見たといふ報知が、流星學者 Olivier 氏の手許に送られた由、今其の要點を譯して見るこゝ、報告者の一人は Tennessee 州 Chattanooga 市の測候所員 C. C. Willipord といふ人で、手紙の一節に

「六月二十六、二十七、二十八、二十九の四晩には多數の流星を見ました。此等はかの彗星の見えてゐた琴座あたりから現はれるらしくありました」

とある、又、同じ六月二十三日午後11時から翌曉3時までの間に、北 Carolina 州 Winston-Salem 市の K. A. Shepherd 氏と R. C. Strelitz 氏其他の人々が驚くべき多數の流星雨を見たこの報告もあつた。Shepherd 氏の手紙には

「流星は殆んど空のどの邊からも見え、續けさまにどし々々出るものですから

其の輻射點を求めるさか、其の経路を正しく圖に畫くなどはとても不可能でした……午後11時には毎時間60個ぐらゐの割合で飛んでおましたが、12時には其れが100個以上となり、其の後は漸次減じて、3時頃には毎時間30個ぐらゐの割合になりました……個々の流星の飛ぶ時間は平均2秒乃至3秒ぐらゐでしたが、或るものは5秒にも及びました……流星は眞直ぐ南の方へ飛びました。之れは天のどの部分の流星も皆同様でした。此うした運動方向は私の多くの友人たちも認めました……午前2時頃には流星の飛ぶ方向が一般に南西へ移るやうでした」

又、Strelitz 氏の手紙には、

「私共が見た流星の数については、とても數字で言へないほど私共を迷はせました。次ぎ々に澤山ものが現はれ、大抵はよほど光りの強いものでした。或るものは大變光りが大きかつたので15〜6分間の後まで何か音響が聞えないかと注意しましたが、何も聞えませんでした。或る少数のものを除き、流星は皆正しく西へ飛びました……私共が見たのは、しかし、流星のホンの一部分でせう。家屋が邪魔してゐましたので」

此等の報告で見ると、其の頃、或る特別な時刻には或る一地方に於いて非常に多數の流星が出たといふことが確かであつて、之れは學問上大切な事であるが、惜しいここにも上記の人々は流星については何の智識も素養も無い人らしかつたやうである。此れ程多數の流星を見てゐながら概略の輻射點さへ決定出来なかつたのは遺憾に堪へない。こんな時、若し充分な觀測が不可能とすれば、逸早く最寄りの天文臺へ電話か電報を以つて知らせ専門家の協力を待つべきである。

今後も、こんな事が何所で何時起るかも知れないのであるから、本誌の讀者たちも常々心得て置かるべき事であらう。

御 断 り

先月の雨夜閑談『ニウトン漫談』中に私は田邊先生のお話としてケルヴァイン卿の事を書きました。そしてケルヴァイン卿が J. J. Thomson であるやうに書いて置きましたがあれは全く私の記憶ちがひで William Thomson の間違ひです。これは全く筆者の責任で田邊先生には實に相すまねと恐縮する次第です。ここに謹んで訂正します。尚ほこの事を注意して下さつた東京の佐野志郎氏の親切に厚く御禮申し上げます。(鴨江簡人)